

あの日の記憶

118 私立武蔵高等学校中学校 鉄道研究部

「眠いなあ……」

そう呟き、僕は電車を降りた。無機質な地下ホーム。薄暗いその空間は、まるで僕の心を表しているようだった。

エスカレーターに身を預ける。寝不足と憂鬱で臉が重い。

何度目か分からない溜息をついた瞬間、眩しい光が目に飛び込んできた。どこか懐かしく、柔らかな、だけれど鮮やかな光。

「これは……」

目の前にあったのは、“在りし日の”東急渋谷駅の姿だった。あの懐かしい姿。あの日の雑踏、人々の声、列車の音――すべてが妙にリアルだ。

「あの時と同じだ…」

若い僕が友人と笑い合いながら目の前を通り過ぎていく。肩にカメラをかけて。あの日の撮った一本の列車。そして、あの日あの場所で初めて声をかけた女性――今の妻の笑顔が鮮明によみがえる。

変わっていく街。

だけど、変わらない記憶。

それが今、夢と現実の間で交錯する。

「眠いなあ……」

僕はまだ、夢と現実の狭間に取り残されていた。